

「にいがたの一冊」

「新潟日報」（新潟日報社）2019年3月3日（日）掲載分

書名：『越後史跡紀行 ～歴史と人物～』

著者：花ヶ前盛明 氏

書評本文：

著者である花ヶ前盛明氏は、郷土新潟県の歴史に関心のある人ならば多くの人が知っている歴史家である。そのお宅は直江津にある居多（こた）神社（延喜式内社）であるが、当社は北陸、新潟県域でも古社として知られる。取り分け中世において、その神職花ヶ前氏は越後国の政治にも大きな影響力を持っていた。本書の中に収められる中世～近世にかけての城館、陣屋に関する文は、そうした出自を持つ花ヶ前氏がかつて新潟日報紙面を飾った記事として掲載されたものであり、今回これらを集大成したのが城郭ファン待望の本書である。

新潟県は中世以降の地名、集落、城館が多いとされる。その理由ははっきりとしないが、平安中期に発生していた大規模自然災害の影響を受けたものであるとの見解もある。著者は主として中世期以降に成立した城館等を1つ1つ丹念に調べ上げ、それをわれわれの頭の中へ忠実に再現して見せる。「紀行」とあるものの、ここには発掘をも含めた同氏のこれまでの誠実な調査、研究に裏打ちされた知見が散りばめられている。城館巡り、山城散策の良い友であるとともに、新潟の城館、陣屋に興味をもってもらうのにはうってつけの本である。北は村上市の大葉沢城跡から、西は糸魚川市の勝山城跡に至るものが網羅される。ただ、今回は佐渡国所在の城館が含まれていないのは少し残念である。

城跡といえば、城郭ファンであるならば『日本城郭大系』（新人物往来社）を思い浮かべる方もいるだろう。こちらはどちらかと言えば難易度が高く、専門的な知識が無いとなかなか理解できなかつたりもする。しかし、『越後史跡紀行～歴史と人物～』は必ずしも専門書という位置付けではないものの、その書名に紀行とあるごとく、あたかもその場に行ったかのような気分させてくれるのである。それは花ヶ前盛明氏の文の明快さ、画像や地図の多用、関連する項目に関する解説等、読者に対する細かな配慮が高いからであろう。例えば栃尾城跡では、長尾景虎（上杉謙信）旗揚げの城としての意義や遺構の様子、江戸初期の廃城にいたる経緯が分かり易く記され、旅行気分をかき立てる。ジャンボ油揚げや日本酒だけでは尽きない栃尾の魅力を再発見することにも寄与していると思う。小林 健彦（新潟産業大学経済学部教授）